

みぬ人々声なき物語して—盛彬版・泉州の人国記

中盛彬の『かりそめのひとりごと』はおもしろい<その2>

橘弘文

1 はじめに

本発表の目的：中盛彬の『かりそめのひとりごと』をいっしょに読みましょう。

本発表で引用する『かりそめのひとりごと』のテキスト：

出口神暁校訂 1967『拾遺泉州志 全』和泉文化研究会

(1) 中盛彬[なか・もりしげ] (1781-1858)：熊取谷の大庄屋 降井家 (中左太夫)

熊取谷の大庄屋＝中家 (中左近) + 降井家 (中左太夫)

(2) 『かりそめのひとりごと』の内容：(『かりそめのひとりごと』において) 記述された内容は、熊取を中心とした泉州地域の歴史・故事・逸話であり、現代的な感覚からは、地域史的内容をもっている(熊取町史編さん委員会編 2000『熊取町史 本文編』熊取町)。

(3) 『かりそめのひとりごと』の執筆過程

① 執筆期間：文化13年(1816)頃～天保(1830-44)の中頃

② 4分冊の冒頭や末尾に盛彬の近況が記される。

〔正〕：[文化13年(1816)]

離婚「むつきのころ、つま(阿伊)をさとへかへせし」

次の結婚までの間、年配の女性の小倉が盛彬の身の回りの世話をし、盛彬の話し相手にもなっていた。小倉が辞めた後、駒三と五百吉という二人の少年が盛彬の朝夕の世話をした。小倉という格好の話し相手がいなくなり、盛彬は退屈した。「日はながし、あめはふる、つとめはしげからず、させるかどはなし、いかに天日を送り、つきをむかへむ、いとせんすべきなきままに、よしなきことがら、ふみに、みおよび、ひとにききすごせしことの、あが州にかかれるかぎりをも、おもひいたすま筆にまかせてかひつけぬ」

〔続〕：[文政2年(1819)の12月～]

再婚「をととしの冬、つま(千枝)をむかへて」

父(盛慶)の80歳の祝いに書画を集めて展覧会をして、その目録を作り人々に贈った。

『かりそめのひとりごと』の執筆を再開する「いまこころのひまを、えぬれば、いで、かりそめのひとりごとの続編を、かかむと、おもふに」

子の誕生。妻がうれしそうに子を抱いて盛彬の書齋に来て「このわかみたまへ、ぬしによく似はべるを、いつのほどにかてて(父)、ははなどとは、いひでなむともいふに」

〔続後〕：卯月末に「いも(痘瘡)」にかかる。5月7日に治り、5月13日に痘瘡の全快祝い。「あまりのうれしさに、いもねられずつくづく、こしかた行く末を思ふに、おのづからなるあめのさがより、人のつねの心さへに、心にうつりころばせに、そひきつつ空(うつ)とひとつに澄渡れば、さらば又かの続後を、かかむと思ふに」

**拾遺**：妊娠中の妻が病気になる。妻の病氣平癒を遠近の神仏に祈願する。「こぞは月の始より妻のいたづきしが、みごもりたるうへなればいとしづ心なくて、遠きわたり近きめぐりの神にほとけに祈りまつらぬもあらざりし。なかにも犬鳴の滝守の神には、みずから幾度もあゆみをはこびておこたりなんことをねぎ」

文政3年（1820）9月3日に男子誕生。同月18日に死亡。同年10月5日に妻千枝が死去。文政4年（1821）2月に父が死亡。縫殿（可寿）が病氣のために里に戻る。「ふすまによれどいもねられねば草枕かりねの夢だにむすびかねつつ、さらばまた『かりそめのひとりごと』の残れるをひろいて、しばしだに思ひわすれむとおもひつつ蚊帳のうちにともしかかけさせて、もろこしの大和の文どもまき返しつつみぬ人々声なき物語して、今昔のことどもを思ひめぐらせば世の中にありとあることのところにうつりきて、なにと筆をたてそめむと思ひまどうに」

(4) 『かりそめのひとりごと』の読者

出版はしなかったが、友人・知人に回覧・書写…→「序文」が寄せられる

儒学者の春田横塘（1768-1828）

国学者の鈴木重胤（1812-1863）

(5) 『かりそめのひとりごと』の人々

盛彬が思い出す人々・盛彬の思い出し方：

和漢の書を読む→「みぬ人々声なき物語」→「世の中にありとあること」→「ところにうつるよしなしごと」

盛彬がじっさいに出会った人/盛彬が聞き伝えている人/盛彬が文献資料で知った人

「普通ではない人」：奇人+すぐれた職人+移住者+非業の死者

## 2 「畸」「狂態」の人

(1) 脇浜新町の岩橋善兵衛（1756-1811）

岩橋善兵衛は脇浜新町の貧民にて、かけ眼鏡ちふものを製して世をわたりしが、中年より箇百耳尼久数奇魯乳頓（コーペルニキウスキールニウトン）が天説理術に心をゆだねしこといふばかりなし。これに酔える如く狂へる人に似たり。後に耕聊堂といふ嘉孝は諱なり。窺天鏡を製しておほやけにたてまつり、諸侯都鄙にひさぎて宝を得ること巨万なれど、その日その時につかひはたしければまづしさはいやまさり行ぬ。新製のもの多し、なかにも運施儀はやつがれの新製なれど蝕に至りて密測ならず。嘉孝精考して外配天を添て大成しぬ。平天儀（和蘭平行儀の密なるものなり）を製し図解一冊をあらはしのぶ。点画をだにわきまへざる文盲の男なりしが、いつとなくみおぼえて老後には授時指要義論のたぐひ仮名まじりのものは読み得しも奇妙なりき。京撰及近国の儒医僧道蕃卜家にしたしからぬはあらず一畸人なりき。或時人間の万伎を論ずるも明暗界に住してみればわらはしくてと書て

ちやうちんやさてはたいまつかがりの火

みなそれぞれのひかりなりけり

ある日つれづれなりしに酒呑み激論せしときに

極楽も地獄もおのが身にありて

いのち終ればともに消行く

おのづからわれも一種の虫也と

しらぬはさはぎしるはたのしむ

又元日の句は甚おかし

和蘭陀のいねつむころよ初日影

望月の句も抱腹なり

しゆみせんのあはせかがみかけふのつき

心術のむかふ処口のはくところ、おほむねかかるおもむきなり。わも深く交りしがさりし  
酉のとし六月みまかりぬ。

<奇人・岩橋善兵衛>

① 中年からコペルニクス、ケール、ニュートンの学説に熱中する

② 巨万の富を得るが、すぐに使い果たす

③ 短歌と俳句

④ 知と経済のネットワーク

岩橋善兵衛は望遠鏡を持って初めて兼葭堂を訪問し、翌日には備後町平野屋作兵衛宅で天  
体観測を行なっている。『兼葭堂日記』寛政5年（1793）10月4日

木村兼葭堂（1736-1802）＝坪井屋吉右衛門

(2) 新在家（しんざいけ）村の望月与齋

新在家村の望月与齋も一世の国手にて酒癖ありすこぶる奇畸なり。その父姑病に罹りしに  
一度も訪はず。伯母怒りて使いをやりて責めければあなむつかしさらば行くべしとてその  
後は日毎に行きぬ。されど酒ばかり飲て飯れば伯母枕の元に呼びすへて、うらみければ一  
診してまづこむなものじやといふ。薬を見すればつい見てさし置きぬ。いかにと問へばま  
づ湯よりはましならむといふ。よきやと問へば効きはせぬといふ。外に思ふ薬ありやと問  
へばなしといふ。病はいかにと問へば死病なりといふ。このほど薬り験しありていまなか  
ばおこたりぬればわもたのみありと思ひ、薬司達も力をえぬとのたまふにあなつたなの者  
やと云ふに、人はともいへみづからも心やすく覚すとも終にかなふべきにあらず。はや三  
十日はたもたずとて袖を払てかへりしがはたして云へるごとくありし。ある時、尾生村よ  
り乗物もて迎ひしに歩行してこそといふに、賤夫いかで畸人の心を知るべきただ辞讓と思  
ひぬればひたと勧む。あな騒がしわは駕籠は嫌いなりさらば駕籠の上に乗るべしとて犢鼻  
褌一つになりて打股がり、一人笑みつつ可笑々々とて路すがら月に囁き詩を吟じ行きし  
に、池塘にて卑夫躓きければ堪えずしてまろび墮ぬ。こはこは過ち候とて引起なむとする

にやがてその手を振払い足にて蹴除け起も直らずいきまきつつああさもあらずとよ。病の苦しさに薬司迎へんほどの者の道なかにて揺り落しからき目見することやある。何よりも浮みし詩句を今の時に忘れしこそ遺憾なれ機すでに尽きぬ。病症今は探りがたし販るべしとて引き返すを、卑夫驚きて様々に云へど聞かざりしが、別にかの病人の兄々あまり遅きを待ちかねてここまで迎ひに来けるがこの男は与齋の心をほぼしりぬればさし出つつ岐公々々聞かせ給へ病人時を追迫りぬ。今は御出候とも治すべしとは思ひはべらず。されど公にまいらせなむとてよき酒肴ととのへ置ぬれば、死なぬまに早来ませ一杓かたむけ給へよと云へば、おかし病人は死なば死ねその酒呑までやはとて笑壺に入て急ぎ行きぬ。謝儀の金額を贈ればこよなふ怒りてわを侮るか。金で命が買はるるかとて投げかへしぬ。酒を贈ればこれぞまことの返報よ心ある哉々とて喜びぬ。かかれれば生涯赤貧いふばかりなし。若き時よりわは酒と討死せむずると云へりしが、老後に沈酔徐歩しながら転び倒れて逝去しぬ天明（1781-89）の末の頃なり。

<奇人・望月与齋>

- ① 名医だが酒飲み
  - ② あけすけな言い方
  - ③ 嫌いなものは嫌い
  - ④ 診療代は酒
- (3) 熊取の恵林寺の仲峰

熊取の庄恵林寺の仲峰和尚は日向の人なり。頗る畸にして清濁をしらず。若き時に病ありて撰の魚崎に庵居せり。この時に暫く掛錫の雲水あり諦哲といふ。こもまた同じ癖の人なり。或日外より販り鍋にて湯を沸しそのままに足を差入れて洗いぬるに、仲峰も又販りしに我らその鍋にて足洗いぬいまだ湯も冷めざらまし洗ひ給へと云ふ。何とて摺鉢にては洗はざりしぞ。内に糸目のあれば手もてせずとも垢もよくおつるにといへりとかや。やつがれ興蔵寺の膺運禅師と共に恵林寺に行しに塵埃うづたかくて座すべき地なかりしかば、膺運師箒をとりきてわと二人坐るばかりを四方に掃きちらされしもおかし。寝所を見れば白き木綿の褐色に染りたるにぞやとみまがうばかりに、垢づきしにて三ところ蚊帳を釣り今一つは縄もてせり。問へば禪の破れしを引き裂きて用ひしがたらざりほどに炭俵ゆひたりし縄もて一つをかけしといはれき。のち慈照寺に移住して遷化しぬ。

<奇人・恵林寺の仲峰>

- ① すり鉢で足を洗う習慣
  - ② 部屋の汚れを気にしない
  - ③ 蚊帳をふんどしの破れと縄でつる
- (4) 熊取の興正寺の黙庵

同莊興正寺の黙庵和尚もまた畸なり。搔餅干飯のたぐひを乾かすに堂の椽板に置いて紙など敷くことなし。昆布・みるめなどは云ふもさらなり。おほね芋などまで掌にて土をさら

さらと払いしままにて煮る。たえて洗ふちふことなし。やつがれ花成寺の紅葉をみむとて、これかれ伴なひて興正寺に行き遊びし時庫裡屋の辺りを立ち巡りて見しにきたなきこといふばかりなし。さて芋飯をまいらせむとて持出せしをみれば薩摩芋を摺潰して飯に塗りたるさま嬰兒のはこ（糞）を打まじへしやうなるに先きの庫裡屋をみたりしに思い合せてひとりもえ喰はで飯りぬ。身は仏に帰しながら儒学をこのみ酔えるが如し。人をみれば必ず踊躍す。其音閑雅其態顛狂たへて俗趣なし。飄々として生涯風顛し世を瓢の如く軽くみなしぬ。文政九年（1826）の頃か病中死期を知りよろづ残りなく人に遺言し悠然として逝化しぬ。

<奇人・興正寺の黙庵>

- ① 食材の汚れを気にしない
- ② きたない台所と見栄えのしない料理
- ③ 人に会えば、踊り歌う
- ④ 自分の死期を知る
- (5) 中の莊村の新川（にいがわ）甚兵衛

明和安永の間（1764-1781）、中の莊村に新川甚兵衛ちふ農夫あり万竹亭文蛤といふ。元は瓦屋村の者なり手などつたなからず誹諧狂歌をよくせし。此ひと活機弁舌拔群にして、ここの婚礼よ、かしこの珍客よ又は石つき、木やりすべて貴賤尊卑のわいためなく諸家にたちいり寺社にあそびて、生涯人に寵せられ世をなぶりものにしてぞあかしくらしき。京阪の花街に名たたる幫閑子もこの文蛤と一座してはおもなくて、ふすまの隅にかがまり居れり。中の莊村はそのころは小堀遠州侯の采地にて侯御若年寄たりし頃、そのみそばめいたづきたるをつれつれをもなぐさめよとて、めされつつ狂態俳話せし時侯いでてつかへよとのたまふ。文蛤いやこの身ははべらずといふ。侯なに故ぞとのたまふに、文蛤別の子細は候はねど、殿の御知行みなたまはりても一万石に候へばわれらは不足に候とおもふばかりに候といへり。その若君金二郎どの文蛤よ将基させよとのたまふに、そもわれらが将基はうつぶしに寝て、腹と睾丸を畳につけ、足の裏をそらに向け、おとがいを肘にもたらかさねばえさしはべらずといふ。さらば思ふやうにしてこそとのたまふに、文蛤はおほけなきけはひもなく、腹這して将基さしたりしが、いつしかもすそまくれて緋の板じめの下帯こそ出かかりぬ。若殿見給ひてあれよ文蛤が尻は女のきるものにてつつんであるはと、いはれしもさずがにとおぼへておかしかりしといふ。又ある時岸藩郷太夫の館にてけふは奥にもあひぬとてやおら奥方のいでられしに穴のあくほどうちながめて、あはれよき奥様やわれらがかかとかへましやうといへり。又一日紀藩の士通行ありしをみてあの行列を止てみせむとて、竹杖二本腰にはさみあとは羽織にて押かへしつ、やがて走り行きて、こは殿には只今御帰国あらせ給ふにや、御機嫌のほどを見まいらせかたじけなくこそとて落涙平伏したりければ、いかなるものにやとてまず乗物を止め徒士きたりてまづまづ手をあげられよそもたれにてわたり候ぞといふに、文蛤はきよろきよろとかしらをあげわらひ見する

に両刀とおもひしは長きみぢかき竹なむさしたれば、さてはきちがひにてありしよとて、主従ともにが笑ひして過ぎゆきぬとかや。平日の所行おほむねかかるおももちにて、いかなる不敬失言もこの男がいへば興となりしぞ天稟の妙なりし。一代のうち秀吟もおほかりし。家集ありみるべし。又行余録もありとききしがいつわりにやわは見あたらず。老後に目は盲たれど口はいよいよかろかりし。辞世も人にききしがわすれぬ天明丑(1781)に物故しぬ。

<奇人・中の莊村の新川（にいがわ）甚兵衛>

- ① 書、俳諧、狂歌にすぐれる
- ② 話がおもしろいので、寺社や家々の行事に招かれる
- ③ 小堀遠州（小堀政峯）との会話
- ④ 小堀遠州（小堀政峯）の若君との将棋
- ⑤ 失礼な言動が許される

### 3 職人

#### (1) 小谷(おだに)村の武右衛門

小谷村の農夫武右衛門が祖父は番匠なりしが若き時江戸に行き職道の修行しぬ。一聡明の男にてその道に暗からず。されば他の大工をばあが家児のやうにいひなして物の数ともせざりければ、皆々憎みあへりけれどすべてのこと普通に手と口とかなひぬればせむすべなし。其ころ森村青松寺の鐘楼を建しにこの武右衛門にあつらへぬ。なべて大工にはそれぞれにいり場ちふことあるに武右衛門はいささかも会釈せず。されど他の大工共云ひもえせでありしが妬む大工共の仕業にやありけむ。あすなむ棟を上ぐべしと云ふその夜棟木を二尺ばかり伐られたり。人みな見てこはいかにといふに武右衛門は驚かず。凡て木といふものは糸の縊り強きが如し引けばいくらかも伸ぶるものぞいざや人々引てたべとてみづからもと末に綱をゆひつけ引や引やと云ふにこの男は狂気せしやと顔なむながむる者もあり。愚直なるものはげに引ば伸びることもやあるとて引くほどに、武右衛門目もあやにうち笑ひつつ木やり唄を拍子おかしくはやしたて一時ひかせて後、間棹をもちてうちむかひよしよしちと伸びすぎたるはとて、なほ三寸余りも伐て難なく上棟せしに皆々驚きあやしみける。そがなかにすこし心を得し者共はあはれ用意や、嘗てより五ケの莊木の島わたりの大工共に妬まれむずれば、棟木柱など伐らるることもぞあるとて二尺余りは長くこしらへ置きしと見ゆ。さればこそ少しもさはがで引き延せよとは戯れけめ。計りし大工は計られて計られし武右衛門は益々名をこそあがるべけれと感じあへりしとかや。

<番匠・小谷(おだに)村の武右衛門>

- ① 技術にすぐれ、聡明だが、憎まれる
- ② 他の大工たちの嫌がらせを予測する

## (2) 堺の堀内一楽

堺の里の堀内一楽は元岸藩の士某の舎弟にて、墓子（だいす）の間を勤めしがいささか誤ることありて浪人をし、堺に住み藤蔓もて小箱のたぐひを製せしが終に妙にいたり能勢の妙見宮に祈り名をたてぬ。この満願のしるしにとてかの藤蔓をもて大なる灯臺を奉納しぬ。一楽ちふは墓子（だいす）番を勤めたりし時の名なり。今は三代を経たり。

### < 藤蔓の職人・堺の堀内一楽 >

藤蔓で小箱などを製作する。能勢の妙見さんに技術の上達を祈願し、お礼に藤蔓で作った大きな灯台を奉納した。

## (3) 宮村金剛法寺の分曉首座

宮村金剛法寺の分曉首座は七山村の農家与七が子なり。鶴膝病にて農のわざかなひがたくなりければ、糸をひき櫛をけづりなどさまざまに世を渡ることをせしかど、思ふやうにもあらざりければよしや諺に肩あらば着る口ありて喰ふと云へど、かくて己も苦しみ父母にも憂目見せむよりはとて、自ら頭をろしつつ興蔵寺の膺雲和尚の弟子となりこの小庵を終焉の地にしめて安居しぬ。今七十余齡なほすくやかにてあり。包丁をよくすと云うにもあらねど手早くものするほどに、このわたりの宝なりとてこゆかしこゆ頼まれつつ刹会村社のわいためなくそこよりここに行き巡り心安く糊口しぬ。あが家にも来りてへだてなく物語たれり。或時に貧道宿因のあらぬにや禅味はかつて知らねども火食の風味は大悟しぬとけしきぼりて云ふ。そは如何と問ふに若き時は凡そ天下の味はひは肉にしくものなしと思ひし。此ときよろづ根葉の味はひは喰ひながら知らざるが如くありしが、かかる身となりて二十年の後に世界の味はひは漬物にこそあれと思ひし。此時に昔は喰らひながら肉の美ならざることを知らざりしよと思ひし。今に至りて漸くに肉は漬を得て濃を淡くし、漬は肉をかりて淡を濃くすることにてその和の至極ぞ真味なりと知りぬ。されば上にいつくしみ下も敬ふことここに君臣のみにしも限るべからず。陽種を下し陰、受て養ふことひとり男女ばかりには限らず。昼夜の如く閑忙の如く一張一弛の間にぞ一条の風味気韻は成就するならめ。愚衲一身に不幸を保ちてかかる身となりし上に老境にさへ深く入りぬれば、今はせむなき繰り言なれどあはれこの境を知り得たらむ人、心もちひて調味せば西江の水を一杓に汲み尽し、東嶺の樹を一刀に伐り砕きてよろしきに適ふの料理をしいだしぬらんといへり。かりそめの戯言なれど深く聞きえたらむにはこの言の味はひこそ無上の美味と云ふべかめけれ。

### < 料理人・宮村金剛法寺の分曉首座 >

①料理を手早くする。家々に呼ばれて料理する。

②食の真髓は漬物と肉の調和にある。

#### 4 移住者

##### (1) 七山村の大工長兵衛

かの雁が音屋文七をはじめ五人の男の国刑に処せられしことは、人みな知れる事なればさらにもいはず。此徒大阪島の内にて喧嘩をし出し、めざましきはたらきせし折から、大工長兵衛ちふ者ここを通りかかり見たりしが、にこつと笑ひてあぢをやるよといひたりけるに五人の者聞とがめて、とりかかりしが残らずこの長兵衛に投伏られぬ。あな思ひよらずよこのわたりに吾ともがらにつづく人はあらじと常はほこりがに思ひしに、そもたれ人なりやと云ひあひて酒くみかはし終に長兵衛もこの徒に加はりける。その後は六人男といへりしが組のかしら文七が人を殺せし時、常のちかひに違はじとて名のり出しに、この長兵衛はもとよりの結義にもあらざりければにや、避て京にのぼり又この熊取谷七山村にかくれぬ。ことはてのち大阪より移住の券を乞えてとどまり住けり。この者小盆膳卓など製すること普通にはこえけり。今もこの者のつくりし物いづれは価常の物よりはたつとし。浄見寺の檀越となりければ法号等残れり（享保なり）此子孫今も長兵衛といふ。家衰へてちかきころ大津村に行ぬ。代々ひとかたならぬ利屈ものが出るもあやし。

<大工長兵衛の移住>：大坂→京都→七山村

##### (2) 鳥羽村の本徳寺の開基南国和尚

岸の和田本徳寺の開基を南国和尚といふ。明智日向守光秀が一子なり。光秀小栗栖にて討死し、亀山の城も没落せし時、左馬之助がはからひにて、かの小児をおとしけるが、光秀帰依の山なりければ、妙心寺をたのみ来りしを、寺僧あはれむで僧となし、命をつぎつつ三英大和尚を師とせり。道なりて後この国に來り、鳥羽村にて一寺を新建し、父の逆意をよしとせざるの心にて、本徳寺とよべり。又光秀が肖像をみづから写して、蘭秀大和尚に題辞を乞ひえ、かつ牌主をもたてて、日夜供養回向をなしけり。今も毎朝怠たらずぞある。この寺、岸の和田へひきうつせしは天和の間（1681-84）なり。今もなほ古き什具には、鳥羽村本徳寺とするせし物あり。ここにかの肖像題辞をも臨写しぬ。

<明智光秀の子の移住>：亀山城→妙心寺→鳥羽村

##### (3) 荒木村の源太夫

荒木村百姓源太夫は摂州伊丹の城主摂津守が子なり。かの城没落の時めのとの女四才の幼主岩楠をいだきのがれて和気村のおのが実父をたのみかくれぬ。この女おのれと幼主との衣服に黄金おほく縫いれ来りしが、こをもてのちに荒地をひらき豪農となれり。ゆへにいっしか荒木村とよびならはせり。もとは吉井村のうちに吉井大膳亮が知行のうちなりし。

（この大膳亮のこと旧記にいまだ見る処なし、但し日根野氏感状にこの姓名出たり）享保のころまではいとさかえたりしが、近年家おとろへしうへに文化十三年（1816）の冬大阪に亡命せりとききしいと口おし。子孫のそのところにあるだにも衰へては人しらずなりゆくこと常のならひなるに、ましてあらぬ里にさまよひ行かむになどかはわすれてあるべき。はてはいかならむ人がおのれがとおつ親の初めにし里なり、などののしるやうにやな

り行きなんかし。この家漸く衰ろへし時家をこぼちしに四方に刳し柱石ひとつありしを、村人乞得て井戸の脇に持ち行き釣瓶石ちふものにしてけり。日を経て水にされ文字こそあらはれぬ。みれば実休禅定門永禄五年（1562）三月五日と刻りたり。その頃は亀田三郎兵衛ちふ人の御代官所なりしが、その手次の人は源太夫にてこのことを聞きやがて村民にもらひて久米田寺の多聞院に送りていふ、亀田殿はもと三好家の一族の末なればこのことを聞きはべらば参詣し候とて金五両をさしそへ来年を約してかへれり。さらに翌年ゆくりなきことありて亀田家衰へぬればかの石はそがままにて方丈の前にありわもさりしとしみき。実休塚のふるじるしにこそ。

<荒木岩楠の移住>：伊丹城→和気村→荒木村

## 5 非業の死者

### (1) 三好実休

額原（がくはら）村のすこし東に実休が塚ありし。いつの頃にか石碑なくなりし後は雨ふり風さはぎてもものすごき夕はかならずこの塚より一団の燐火いでて、その上なる松にするするとあがり枝さきにまろびかかりてもゆる。この村の稚児ども又こそとて家に遁れ入りおそれあへりしこと年久しかりしが、文化十二乙亥（1815）の冬の十一月阿波の国の人小さき碑をも建てかの多聞院に來りていふ、やつがれは三好実休か末孫のものに候がこのほど実休夜々枕にたちてわが久米田の塚にしるしなし、いそぎ建よとまうすとおもふ夢を見候ゆへにわざわざのぼりしとて持來りし石を建て、この多聞院主亮雅和尚をたのみ仏事かたのごとくいとなみて歸りしが、その後はこの火たへていはずなりぬ。

三好実休：三好長慶の弟。永禄5（1562）年3月5日、久米田の戦いで戦死した。

<実休の塚と石碑>実休が久米田で戦死→額原（がくはら）村の東に塚と石碑→石碑がなくなる→雨風の強い夕方に塚から燐火が出る→1815年11月に実休の末孫の阿波の人が来て石碑を建てる[実休が夢に現れ、石碑を建てるように言った]→実休の塚から燐火が出なくなる

石橋直之編 1700『泉州志』：額原村の東にあり。曾孫、三好篤慶、近来、墓石を建つる（原漢文）。

秋里離島著・竹原信繁画 1796『和泉名所図会』：額原（かくはら）村の東にあり。曾孫（そうそん）三好篤慶（みよしあつよし）、近来（ちかごろ）、墓石（ぼせき）を建る。

### (2) 津田村の左衛門

津田村の左衛門は、させる系譜あるいへには、あらねど、ときの城主に寵せられて、一とたび代官格となれり。文禄四年（1595）の夏旱魃せしに、新井（にい）村大池の水を、中村の田にもかくべしといふに、さはさせじというほどに、終りにあらそひとはなれり。左衛門ききて、そはひがごとなめり。この池きづきしときより、底水のさだめははあるものをとて、かしらどれるもの三四人を、よびすへて、まふしさとしぬれどかしこには大勢む

れいて、ののしれば、せむすべなしというに、いまはとて、うま引よせ打のりつつみづから池辺にいたり、沙汰よくしてかへり来りしを、中村の百姓七人、南おもての藪の中にかくれいて、竹槍もてあへなくつきころしぬ。この七人、小出播州の令にて解死人となりけらし。この左衛門は、無二の石山門徒なりしゆへに、顕如和尚みづから法号を書して、浄土信士といへり。今なほもちつたへたり。七人塚は池の南にのこれり。今も此ことを、いとひき歌に、つたへたり。そのうた

おいとしや津田村の左衛門は中村畠で討れた竹はまた箸か刀か庖丁か中村畠はまな板  
文禄四（1595）乙未（きのと・み）四月二十四日の事なりし、ことし迄二百二十五年、ものかはり屋うつりて、今は知れる人はおほからず、いつしか、このうたさへも、わすれはてたらむ後は、七人の塚も池にやなりなむ、田とやすらむ、今の六左衛門はこの末也。またあるひと、かの左衛門がしるしの塔は、ちかきころ岸の和田村の東、字を東光寺ちふ溝の橋にかけたりといえり。予もことし、はるのころ、行てみぬれど、裏を表として架たれば、文字は見がたかりし。後に琴泉子が打かえして見しに、南無妙法蓮華経・逝去・唯心院日実信士覚霊・寛文十年（1670）庚戌正月十八日滅・俗名津田四郎右衛門尉正光とあるよしいへり。さらば、こは左衛門がしるしにはあらで、その子孫の塔なるべし。いつのころ、日蓮宗に帰依せしにや、今はまた親鸞宗なり。

<水争いと代官津田村の左衛門殺害事件>：文禄4年（1595）夏の早魃→新井（にい）村大池の水をめぐる争い→代官格の津田村の左衛門が争いをおさめようとする→文禄4年（1595）4月24日に中村の7人が津田村の左衛門を殺害する

<事件の記憶>：糸引き歌「おいとしや津田村の左衛門は中村畠で討れた竹はまた箸か刀か庖丁か中村畠はまな板」+七人塚

[津田村の左衛門殺害伝説のヴァリエーション]

①大阪府小学校国語科教育研究会「大阪の伝説」編集委員会編 1970『大阪の伝説』日本標準：

麻生（あそ）郷村には、こんな田植え歌が伝わっています。

「おいとしや、津田の佐与茂は、中村畑でうたれた。中村にや、うちて喜ぶ。津田にやうたれて悲しむ。あれおそろしや。出刃や刀で、中村畑はまないた」

ときは寛永、家光が三代将軍になったころのことです。

その年は、めったにみられないかんばつとなり、空梅雨が続ききました。いつもの年なら、六月二十日すぎに行う田植えも、この年は七月に入っても、まだできませんでした。

当時、麻生郷村には、六つの字（あざ）の共有の池（今の新井池）がありましたが、その池の水を全村に送って田植えをすると、田植えだけはできても、あとの補充ができません。……

②三善貞司編 2008『大阪伝承地誌集成』清文堂出版：

佐衛門は文禄四年（一五九五）の大早魃で、水争いの犠牲となった代官格の豪農だが、佐与茂が正しいという説もある。六月初旬の田植が七月になってもできず、新井ノ池の水量も乏しくなり、いつもは六カ村共有だが役人たちは相談し、まず四カ村を優先して引水、田植えを済ませる。……

## 6 おわりに

### (1) 信念と行動

### (2) 家の盛衰

### (3) 女性たちは？……「春木村のおもえ」

- ① おもえは幼少期から水泳を好む。
- ② 忠岡村の男性と結婚。
- ③ 離婚後、大坂城の淀殿に仕える（名を幾瀬・白井）。
- ④ 夏の陣（1615）→堀に飛び込む…水門…大川…藤堂泉州の陣前に浮かび出る。
- ⑤ 春木村に帰る

春木村に又兵衛ちふ農家あり、ふるき家なり。慶長のころ（1596-1615）の又兵衛のむすめ、おもえといふ。いと雄々しくて、いとけなきより水をおよぐわざを、このみ、つねは渚汀にいでて、水にひたりあそべるを、女には、似げなきことぞとて、となりほとりのものあるは、うからなど又兵衛によくをしへねといふに、よしやうまれつきで、このむ、ことには、あやうきことはなきものぞ、またたすくこともぞあるとて、おほかたとどめずしてありわたりぬ。このむすめひととなりて、忠岡村の甲藤兵衛ちふものにとつぎしが、このおとこの痴愚（しれ）たるを、いとはしくおもへど、ひとたびとつぎしうへは、いかにとも、せむすべはなかりしに、ふと、ひとつのはかりごと、おもひいでて折ふしつまに、いひけるは、ぬしのこと何ごともおひらかに、おもひをくれたらむには、いとまのふみかくことをしも、えせじをと、たはぶれしに、このおとこなでうさまでのこと、しらでやはあるべきといふ。さらばかきてみせ給へといふに、やがて筆をそめつつ、かきいでぬ。女みて、あて名のかきどころはしらじ、もししらばころみに、あが名とぬしの名を、しるしてみせ給へといふにまかせてかきぬ。よもしらじと、おもひしに、よくもこころへたまへりとて、この紙をついとりて、反古にするやうにて、やがて、ふところに、おしいれにげてかへりぬ。その後いかなるよしの、はべりしにや、大坂の城にいり淀どのにつかへ、名を幾瀬とよびつ。また白井ともいふ。しらいは、おのれが家の苗字なり。夏御陣に城内ちからきはまり、本丸につほみてみなみな生害の期にいたり、かねての水練ここにてこそとおもひ、髪をかぶり衣を脱すて、堀に飛り水門より出て、みなそこをくぐり大川を流れくんだりて、藤堂泉州の陣前にぞ、うかみ出たる。兵士あやしみとらへてそのゆへをとふに、しかしかのよしをまうし、春木村にかへし給へかすとねがふさま、いつわら

ざる趣なればゆるしをえて、おりふし川尻につなぎし春木村の船にたよりにて、ふたたび、ふるさとかへりける。この時に淀どのにもらひたりし、金の黒骨の扇子と、鼈甲の板に虎の毛をひしとうへし、くしはらひとを、もとりのもとおしかふてかへりしが、今もこの家にもちつたへたり。わも、こぞの秋みつ、よくこころたけき女なりしにこそ。…

<参考文献>

天野忠幸 2021 『三好一族—戦国最初の「天下人」』 中公新書

有坂隆道 2005 『山片蟠桃と大阪の洋学』 創元社

池内了 2022 『江戸の宇宙論』 集英社新書

石橋直之 1700 『泉州志』

稲葉新右衛門 1781 『装剣奇賞』 卷七浪華芝翠館蔵板

今谷明 2007 『戦国三好一族 天下に号令した戦国大名』 洋泉社新書

大阪歴史博物館編 2003 『木村兼葭堂—なにわの巨人—』 思文閣出版

大阪府小学校国語科教育研究会「大阪の伝説」編集委員会編 1970 『大阪の伝説』 日本標準

太田浩司 2012 『テクノクラート小堀遠州 近江が生んだ才能』 サンライズ出版

株本訓久 2022 「岩橋善兵衛の望遠鏡」 『科学史研究』 61 卷 302 号

神田千里 2020 『顕如』 ミネルヴァ書房

気象研究所監修 2002 『翻刻歴史史料叢書 5 日本早魃霖雨史料』 クレス出版

近世歴史資料研究会編 2019 『近世歴史資料集成 X 期 民間治療 18』 科学書院

熊取町史編さん委員会編 2000 『熊取町史 本文編』 熊取町

田中實 2012 「荒木村重ゆかりの史跡探訪記」 『村重』 11 号 荒木村重研究会

出口神暁校訂 1967 『拾遺泉州志 全』 和泉文化研究会

出口神暁 1985 『出口神暁遺稿集 名所古跡を訪ねて』 浄土宗本願寺派稱名寺

福島克彦 2020 『明智光秀 織田政権の司令塔』 中公新書

二木謙一監修・校注 1995 『明智軍記』 新人物往来社

沼田次郎 1989 『洋学』 吉川弘文館

堀口康生校訂 1967 『和泉名所図会』 柳原書店

南川孝司・万代博史編 2017 『鬼洞文庫主宰 出口神暁著作選 流木をあつめて』 出口神暁

追慕著作選刊行会

三善貞司編 2008 『大阪伝承地誌集成』 清文堂出版